

第2章 研究資料及び研究史

1. 朝鮮資料の性格

『朝鮮版伊路波』と『捷解新語』を中心とする朝鮮資料は、小倉(1964)以来、これまで、ハ行音、エ列音、鼻濁音、四つ仮名に関する日本語史の資料として用いられている。以下では、まず、朝鮮資料、および朝鮮資料の特性について、概略してみることにする。

濱田敦(1970)は、朝鮮資料について、朝鮮における日本語の学習書と、日本における朝鮮語の学習書との二つの種類を一つの共通した言語資料として取り扱う。

「朝鮮資料」とは、日本語の、特に歴史的研究に役立つべき資料の中、「朝鮮」にかかわるものをとり出して指すものであるが、それらは、単に、その外部的形式においてのみならず、内部的本質においても、共通した性格をもって、一つの類をなしていると認められるものである。ここで、わざわざ広く「朝鮮にかかわる」と云ったのは、それらが、必ずしも、朝鮮の地において朝鮮の人の手によってつくられた日本語学習書のみでなく、日本で、日本人の手によつてつくられた、つまり、朝鮮語学習書などをも含めようとの意図に外ならない。

(p. 37)

朝鮮人によるハングル表記の朝鮮資料は、イエズス会の宣教師達によるローマ字表記のキリシタン資料、中国人による漢字表記の中国資料とともに、外国資料として日本における仮名表記の仮名資料と対立する。特に、ここで取りあげる朝鮮資料の資料的特性は、朝鮮語が日本語と構造上相似た、膠着語と呼ばれる性格の言語で、それを表記するハングルは、日本語の仮名と同じく一文字が一音節を表わすが、一

方、仮名とはちがって、一文字が音素と音素との組み合わせによりつくられているので、一応音素に対応する要素に分析することが可能である。特に、『捷解新語』のように、会話体の日本語本文と朝鮮語による音注と対訳が一世紀余りの時期にわたって改訂を重ねた資料が存することで、日本語史の貴重な研究資料として利用されてきている。さらに、『捷解新語』はキリストン資料とほぼ同じ時期の資料として、相互に補完できるという点で重要な意味を持つ資料である。

本論文では、朝鮮資料における表記の規範性と音韻との関係を明らかにすると同時に、日本語学習書としての規範性の解明を行い、日本語史研究資料としての朝鮮資料の位置付けを改めて論じることを目標としている。そこで、以下では、まず、日本語学習書、及び朝鮮語学習書の主な資料を取りあげ、『捷解新語』を中心とするそれぞれの資料の具体的な内容、価値等について概説する。

1.1. 日本語学習書

朝鮮人のための日本語学習書として、『朝鮮板伊路波』(1492)、『捷解新語』(原刊本(1676)、改修本(1748)、重刊本(1781))、『倭語類解』(1785~88)、『隣語大方』(1790)、『方言類解』(1778、『方言集解』とも言う)等が挙げられる。

* 『朝鮮板伊路波』(1492)

朝鮮に於ける日本語学習書の最も初期に属するものの一つで、冒頭に平仮名いろは、片仮名イロハがあり、また、『同音三十三字類』、『別作十三字類』等があげられている。なお、エ列音、サ行音、タ行音、ハ行音などのハングル音注は日本語音韻史の上で重要な資料とされる。

* 『捷解新語』三刊本(原刊本(1676)、改修本(1748)、重刊本(1781))

朝鮮に於ける司訳院の日本語教科書で、話し言葉(卷一~卷九)はもちろん、候文體書簡文(卷十)を収めている。『捷解新語』の総目次を卷別に取りあげると、以下の通りである(京都大学文学部国語学国文学研究室編(1972)による)。

卷一

序	凡例	與代官初相接	送使船問情	(難字解)
---	----	--------	-------	-------

卷二

茶禮講定	茶禮問答	饌品器皿論難	封進物看品
------	------	--------	-------

卷三

下船宴問答	始行中盃禮	送使催問書
-------	-------	-------

卷四

銅鑼看品停當	銅鑼看品	公木入給停當	公木入給
--------	------	--------	------

卷五

信使探候船	信使到馬(嶋)
-------	---------

卷六

信使與島主語	離馬向江戸	島主請下陸歎
--------	-------	--------

卷七

筑前主禮候信使	信使接江戸使	入江戸見關白
---------	--------	--------

卷八

信使不受金	信使還到大坂城	島主請信使餞宴
-------	---------	---------

卷九

與代官相約振舞	和語謙讚	日本各道州郡
---------	------	--------

卷十上

初相接狀	入館後先通狀	講定茶禮狀	茶禮後賀狀
------	--------	-------	-------

茶禮後禮物狀

卷十中

封進宴論定狀	封進宴停當後通報狀	宴享日進物件為先看品事狀
--------	-----------	--------------

封進宴後賀狀	日本船出來案內狀	着船賀狀
--------	----------	------

卷十下

銅鑼勿許出給商人事狀	請公木米入給狀	請廻次振舞狀
------------	---------	--------

振舞後賀狀	伊呂波眞字半字竝錄	伊呂波吐字
-------	-----------	-------

伊呂波合字	伊呂波眞字草字竝錄	簡略語錄
-------	-----------	------

伊呂波半字豎相通 伊呂波半字横相通 (難字解)

(原刊本は十巻十冊で、巻十が上中下に分けられていない：筆者注)

以上の総目次を内容別に大まかに分けてみると、以下のようにまとめられる。

巻一～巻四 日朝両国役人の貿易・接待に関する内容(公談)

巻五～巻八 朝鮮通信使訪日時の酬酢(宴席での盃や言葉のやりとり)等の内容

巻九 前半部は日朝両国役人の接待に関する内容(私談)

後半部は信使酬酢に関する内容と国尽(日本八道の紹介)

巻十 日朝両国役人の接待に関する内容(候文体書簡文)

三刊本の要点を簡略に紹介すると、以下のようである。

まず、原刊本(1676)の形式は、巻数は十巻で、平仮名及び漢字(御、申、候、内)を交えた日本語本文を中心に、その右側にハングルによる音注が用いられており、文または句ごとに割注による朝鮮語訳が用いられる(巻十は、漢文による訳)。

それに対して、改修本(1748)、重刊本(1781)は、巻数は原刊本と同じ十巻であるが、巻十を上中下に分けた結果、十二冊となっている。また、平仮名及び漢字を交えた日本語本文を中心に、その右側にハングルによる音注が用いられているのは原刊本と同じであるが、原刊本の割注による朝鮮語訳は改修本、重刊本では、日本語本文の左側に記されている。但し、巻十の書簡文には、日本語本文の左側に漢文による対訳が用いられており、更に、原刊本にはなかった草書体と朝鮮語訳の割注が文または句ごとに用いられている。なお、重刊本の場合、形式面では、改修本とはほぼ同じであるが、日本語本文に区切り点「。」と句読点「〇」を用いている。これによって、日本語学習に役立てたものと思われる。

以上のように、『捷解新語』の日本語、朝鮮語が当時の話し言葉をよく反映していることは、すでに指摘したとおりである。特に、原刊本の編者である康遇聖の日本滞在が16世紀末から17世紀初であることを考えると、本書の日本語は室町時代末期から江戸時代初期の日本語を反映していると言える。また、一世紀余りの期間に

わたって同じ内容が改修本、重刊本へと改訂されていることと、日本語本文を中心に、ハングル対訳、及び朝鮮語対訳が存することから、日本語史と朝鮮語史双方の研究資料として重要視されている。

* 『倭語類解』(1785~88)

『倭語類解』は、日本語の辞書としてこれより先に刊行された『捷解新語』とともに、日本語の学習と日本語訳官の科試用として編纂されたもので、内容をみると、上(乾)・下(坤)二巻二冊となって、下巻末に挙げている口訣(吏讀)まであわせると、総語彙数4400余の資料である。百科事物を約六十の項目に分けて、見出し項目(漢語)に、韓国字音と日本字音の音読みをハングルで併記し、また、その下に、見出し項目の訓読みをハングルで転写した朝鮮司訳院の日本語辞書(語彙集)である。

* 『隣語大方』(1790)

『交隣須知』が単語を基礎とした初等会話集であったのに対して、『隣語大方』は、談話の上で必要な説得・弁解・相談・挨拶を習得するための高度なものと言えるであろう。各巻の最初に「公儀之事」(巻一)、「才勝薄徳」(巻二)のように、題目をあげてあるが、これらは、各巻の内容を示したものではなく、単に各巻の冒頭の語句を抽出したのに過ぎないのである。訓話から商談に至る、長短、種々雑多の所載項目は510項を数え、約四分の一程は当時の交通の第一要件である公貿易のことと属する。日本文を草体で記して、それに当たる朝鮮訳は、日本文より1字さげて漢字交じりハングルでなされている。

また、『隣語大方』には、朝鮮刊本のほかに、朝鮮語学習書である、苗代川本・明治刊本(即ち日本本)もあり、内容と体裁などについては、ほとんど三本一致するものがある。

* 『方言類解』(1778,『方言集解』ともいう) 『方言類解』は、四巻二冊の筆写本で、漢字である中国語の見出し語に、ハングルの対訳をのせ、その下に漢語・清語・蒙語・倭語の順で、ハングルで対訳、表記した対訳語彙集である。内容は、天文、

時令、地輿など、87項目に分けられていて、見出し語数は5200ほどで、『訳語類解』『訳語類解補』『蒙語類解』『蒙語類解補』『同文類解』『倭語類解』などを整理、補充した文献である。

1.2. 朝鮮語学習書

日本における朝鮮語学習書として、『全一道人』(1729)、『交隣須知』(19世紀初)等が挙げられる。

* 『全一道人』(1729)

本書は、朝鮮語を片仮名で記し、要所にハングルをその右に宛て、後に漢字平仮名交じりの日本語訳を付するのである。この、片仮名・平仮名の使い分けは、当時の両者の用途を異にした習慣を示すものと思われる。即ち、平仮名は、一般的な、社会に共通の通用文字として用いられ、これに対して、片仮名は、精密な表記を旨として、学術的で実用的な方面に用いられたのである。また、資料的価値については、安田(1964)において、「朝鮮語の音韻史の記述に当たって、朝鮮人自身が母語の立場から諺文で記録した資料が存するにしても、かかる資料、即ち、日本人が朝鮮語を仮名表記した資料の方がある意味で、より有用なものと言えるであろう。しかも、朝鮮語の諺文表記も存し、仮名表記と比較検討し得る点からも、利用価値の高い文献である」としている。

* 『交隣須知』(19世紀初)

『隣語大方』と共に、徳川時代より明治の初年にかけて、日本における朝鮮語学習書として最も広く使用された会話書である。小倉(1964)も指摘するように、『交隣須知』とよばれるものにも、刊本、写本それぞれ幾つかの種類があり、その内容は必ずしも一致しないけれども、巻数が四巻を以て完結するという点においては、すべてに共通するところである。本書の内容は、他の諸本とほぼ同じく、各巻は、「天文」「時節」などの諸部門に分類され、各丁の表裏六行ずつの行頭に見出として「天」「日」などの漢字がしるされ、それを含んだ朝鮮語の短文をその下に諺

文で示し、原則としてその右にその朝鮮語の対訳としての日本語を片仮名で記している。

2. 研究史 一先行研究と問題提起一

本節では、『捷解新語』に関する先行研究を概観した上で問題提起し、本論文の研究の目的を明らかにする。これまでの朝鮮資料に関する研究は小倉進平以来、語彙、文法、表記・音韻など多方面から多くの研究が行われている。本節では、『捷解新語』そのものを研究対象とした解題や研究史等の先行研究を中心に取りあげる。個別の言語事象について『捷解新語』を資料として利用した言語史研究の先行研究は、数多く存するが、ここでは詳細には取りあげない。

朝鮮資料における全体的な研究として森田(1973)、安田(1973)、安田(1987)、安田・鄭光(1991)などによる複製本類の解題と、大友(1957)、Seung-bog Cho(1967, 1970)、安田(1980)、龜井(1984)などの研究がある。一方、個別的な研究においては、原刊本におけるハングル音注の解釈が主な対象となり、濱田(1955)は舌内入声tについて、大友(1956)は濁音表記の鼻音を問題とし、安田(1970)、奥村(1991)ではハ行子音の音価の変化過程を述べ、荒木(1975)は並書表記を取り上げ、杉戸(1989)はエ列音音注について、杉戸(1992)はタ行オ段拗長音の音注について朝鮮語史からの検討が不可欠であることを述べている。また、辻(1997)では、『捷解新語』改修本における日本語本文と朝鮮語対訳との配置関係を中心に調べ、日本語本文に対する対訳のさせ方を検討することによって、両言語の構造に対する文法意識、文法分析に関わる問題を探ることができるとしている。趙岡熙(2001)では、日本語の「母音表記、子音表記、拗音表記、長音表記、促音表記、撥音表記」の部分の日本語に対するハングル音注を調べ、日本語音声・音韻について考察を行っている。

以下では、本論文と密接な関わりがあると思われる先行研究を中心に森田(1973)、安田(1973)、安田(1987)、辻(1997)、趙岡熙(2001)などを概観し、問題点を指摘する。先行研究の引用や箇条書きの部分は、出来る限り原典に忠実を期し、引用する内容が明確でない場合は「筆者注」を付ける。

2.1. 先行研究の概観

2.1.1. 森田武(1973)

森田(1973)は、『捷解新語』原刊本の解題として、書名と編纂の目的、形体、著者、成立の時期、写音法(仮名表記、諺文表記)、誤謬の例などを挙げている。本節では、本研究と直接関わりがあると思われる形体と写音法(仮名表記、諺文表記)を中心概観する。

(1)形体：各行の中央に、平仮名を主とした本文を置き、その右側に諺文による音注を加え、語句のきれめに割注を挿んである。割注は、卷十だけは特別だが、他の九巻のは漢字まじりの諺文の朝鮮語訳である。本文には、時に漢字「御・申」の草体をまじえ、仮名でも「お・か・へ・り」には、「於・加・遍・里」の草体を用いて、例外がない。卷十ではこれに漢字「内・候」の草体が加わり、仮名に平仮名の「お」及び「伊・加・喜・久・古・志・寸・堂・徒・天・丹・乃・波・三・屋・路・王」の草体が加わる。これら本文の文字は一般に稚拙で、中にはほとんど文字の体をなさぬものさえある。

(2)写音法(仮名表記)：平仮名で記した本文の仮名づかいは、長音表記の場合を除外して、大体に表音的であって、イ・ヒ・ヰは「い」、エ・ヘ・ヱは「ゑ」、オ・ホ・ヲは「お」、フ・ウは「う」、ハ・ワは「わ」に統一して書かれている。これに対する例外は、卷九国尽の中に、国名を「おはり」(尾張)、「あは」(安房)、「ては」(出羽)、「すはう」(周防)、「あは」(阿波)と記した五例だけである。

長音表記の場合は右(本論文では「上」：筆者注)と違つて、ウ段・オ段ともに歴史的仮名づかいによるものがはるかに優勢である。

にうくわん(入館、-20ウ) めづらしう(珍、三4ウ)

みやうにち(明日、-27オ) やうじやう(養性、-33オ)

とうぜん(同前、四4ウ) よう(良、八4オ) てうせん(朝鮮、三15ウ)
 けう(今日、一8オ) せうし(笑止、十24ウ)

ただし、混乱した例もあるのであって、きれいに統一されているわけではない。

とうく(道具、九19オ) こう(斯、八6ウ) 申そう(七15ウ)
きやうりやう(教令、八11オ) しやうりう(笑留、十8オ)

(3)写音法(諺文表記)：日本語本文の右側につけてある諺文の音注を、五十音図にならって整理した上、「諺文による表記はかなり複雑なものがあり、表記法の一貫しないものがあって、これによって一々の音節の音価を的確に推定することは困難である」とし、一部の注意すべき表記法を挙げている。

①濁音の表記：原刊本の濁音表記には、三様の方法が取られている。

(a)第一方法：濁音たるべき音節は清音または半濁音の綴字で示し、その直前の綴字の末尾に m・n・ŋ のどれかを加えて示すものであって、語中・語尾の濁音表記に用いられる方法。

および' o -' yom - pi(及、一18オ) ゆだん' yun - tan(油断、一9オ)
 かず' kan - su(数、一9ウ) なにがし na - niŋ - ka - si(某、一1オ)

(b)第二方法：第一の方法の応用である。即ち、第一の方法では、語頭の濁音を表記することができない。m・n・ŋ を先行させて添えるべき、前の綴字がないからである。そこで、m・n・ŋ を一綴字に取り込んでしまう方法。

どこ nto - ko(-15ウ) 御ざる ŋko - za - ru(-3オ)

ばん mpan(晩、六4ウ)

(c) 第三方法：一つの綴字だけで濁音を示す点に於いては、第二方法と同じであるが、第二方法のように m・n・ŋ を含まぬもの、即ち、第一の方法とは無関係なものである。これには種々あるが、その中最も例の多いのは、ザ・ジャ行音に限って用いられる z と母音字との結合である。

たいざ ta -' i - za(対座、六1ウ) まんじ man - zi(万事、一3ウ)
のぞみ no - zo - mi(望、六5オ)

(d) バ行には p・pp・pp'・p'p と母音字とを結合した綴字が用いられ、この中最も多いのは p である。

こばん ko - pan(小判、八2オ)

かんぼく kam - ppo - ku(看品、三28ウ)

びやうちう pp'yo -' u - cyu -' u(病中、三3オ)

さいばん sa -' i - p'pan(裁判、八32オ)

②並書表記の分類：原刊本における並書表記を分類し、次のようにまとめている。

(a) カ行・タ行の清音各音節、およびソ・ノの十二音節に限って現れる。

(b) 語によって並書だけを用いたもの（助詞「こそ」のソなど）もないではないけれども、なお、助詞「から」のカに ka, kka があり、助動詞「た」に ta, tta があるように、同語が二様に記されたものもあって、全体的には必ずしも語に固定しているとは言えない。

(c) 必ず語中・語尾に限って用いられ、語頭の例は全く存しない。

(d) 前述のバ・ボの場合（バ行の濁音表記は、多くの例に p- が用いられるが、

さいばん(裁判)、かんぼく(看品)の例のように並書の pp 一が用いられる場合もある(筆者注)を除外すれば、明らかに濁音を写したと考えなければならぬような例は見出されない。

- (e)先行の m・n・ŋ と応じて濁音を示す方法、即ち〔鼻音+清音〕の清音の位置に用いられたと見られるものは存しない。
- (f)「もつとも」(九8オ)を mot - to - mo と記すような促音表記の、先行の t と応ずる位置、即ち、右の to の位置に用いられた例はほとんどない。右と同じ語を mot - tto - mo としたのは(五6ウ)、珍しい例外である。

③長音の表記: 原刊本におけるハングル音注の長音音節の表記をウ段及びオ段に分けて説明している。内容をまとめてみると、以下のようなである。

○ウ段長音音節

- ・iu から転じたもので、二様に表記される。
 - (a) しんぢう sin - cyu - ' u (心中、九12ウ)
 - (b) ちうしん ci - ' u - sin (註進、十16オ)

○オ段長音音節

- ・(a) au から転じたもの: やうじやう yo - ' u - zyo - ' u (養性、一33オ)
 - ・(b) oo から転じたもの: とうい to - ' o - ' i (遠い、一22ウ)
 - ・(c) ou から転じたもの: いつそう' it - so - ' u (一艘、一11オ)
 - ・(d) eu から転じたもの: まるせう ma - ru - syo - ' u (-26ウ)
- また、(d)の特異例として(e)(f)の例をあげる。
- ・(e) てうせん tyo - ' u - syen (朝鮮、五13オ)
 - ・(f) てうせん cyo - ' u - syen (朝鮮、三15ウ)

④入声及び促音の表記: 字音の入声ツは、t で写されている(巻十のみ)。

いつぴつ' it - pit(一筆、十3才・7ウ・33才)

きさつ ki - sat(貴札、十5才)

促音も原則として t をもって写している。

もつて mot - tyoi(以て、-11才)

もつとも mot - to - mo(尤も、二2才)

じつそく zit - so - ku(十束、四18ウ)

⑤撥音の表記：諺文には三内鼻音に対応する m・n・ŋ があって、三者とも原刊本に用いられている。まず、語の末尾には n だけが用いられる（ローマ字表記は筆者による）。

かんにん kan - nin(堪忍、-24才)

じなん zi - nan(指南、九12才)

語中には m・n・ŋ ともに用いられるけれども、下に続く音節によって使い分ける傾向が著しい。

(a) m はバ・マ行音節の前に限られる。

ふんべつ hum - pyoi - ccu(分別、四13才)

けんもつ kyom - mo - ccu(見物、八10ウ)

(b)ŋ はカ・ガ行音節の前に限られる。

ぜんこう zyoing - ko(前後、六9才)

さんぐん saŋ - kun(三郡、九23才)

(c)右(本論文では「上」:筆者注)の(a)(b)以外、即ち、カ・ガ・バ・マ行以外の音節の前にはnが用いられる。

こんてう kon - tyo -' u(今朝、十6ウ)

こんにち kon - ni - ci(今日、八26オ)

さんし san - si(三使、五28ウ)

しんぢう sin - cyu -' u(心中、六10オ)

以上、森田(1973)の『捷解新語』原刊本の解題を、形体と写音法(仮名表記、諺文表記)を中心にまとめてみた。以下、安田(1973)の『捷解新語』重刊本の解題との比較を通して、改修本成立の意義を検討してみる。

2.1.2. 安田章(1973)

安田(1973)は、『重刊改修捷解新語』(本論文では「重刊本」、以下同様:筆者注)の解題において、「初本」(本論文では「原刊本」、以下同様:筆者注)と改修本とを対比し、改修本成立の意義を述べている。本節では、森田(1973)の原刊本の解題との比較のため、形体と仮名表記、ハングル音注を中心に概観する。

(1)形体:日本語本文は、大体において、平仮名を用いているが、漢字「御」「申」の草体をまじえ、仮名でも、「お」に対しては、「於」の草体を用いる。巻十では、漢字「内」「候」の草体が加わる。以上の字体は、すべて、巻十(下)巻末の「伊呂波真字半字竝録」に示されているのである(ただし、仮名の「を」「ゐ」「江」は巻九までは用いられていない)。更に巻十には、仮名「お」「を」「お」および、「伊」「路」「者」「丹」「本」「里」「累」「王」「加」「太」「堂」「律」「奈」「乃」「具」「屋」「古」「江」「天」「三」「志」などの草体が加わるのだが、これらもまた、「伊呂波真字半字竝録」に見えるのである。初本の文字は、一般に、稚拙であったが、本書のは、まず優雅というべきである。仮名「ん」は、必ず他の仮名の下に連ねてあること、初本と同じい。「ん」

で終わる連字(本論文では「連綿表記」、以下同様：筆者注)は、必ずしも、他の、いわば単字と、同一字体をとるとは限らない。更に拗音を含む場合も連字を用いる。ただし、拗長音は、開拗長音に限って連字を使う。この拗音の場合も、単字と、字体は必ずしも同じではない。

以上の仮名に対し、濁音も半濁音も付けていないのは、やはり初本同様である。

また、句読点は、円(「○」：筆者注)でなされている。初本において、結果的に句読点の役目を果たしていた割注のあった個所に、そのまま本書では、施されていると見られる。更に点(「。」：筆者注)で、右(本論文では「上」：筆者注)に見た円に挟まれた、句・文に区切りがなされていることである。

(2)仮名表記：仮名本文の仮名遣いは、巻九以前は、ほぼ初本どおりである。即ち、長音表記の場合を除くと、語中・語尾のハ行音を初めとして、大体表音的である。イ・ヒ・ヰは「い」、エ・ヘ・ヱは「ゑ」、オ・ホ・ヲは「お」、フ・ウは「う」、ハ・ワは「わ」に統一され、その例外は、やはり、初本どおりの国名の場合である。「おはり」・「あは」・「では」・「あは」の四例である(初本「すはう」は改修本(本論文では「重刊本」：筆者注)で「すおう」となっている)。しかし、巻十では、右(本論文では「上」：筆者注)の原則はくずれて、特に、助詞、ハ・ヘ・ヲは、「は」・「え」(江)・「を」になる。

また、初本では、仮名遣いについて、巻十とそれ以外と差が認められなかつたことを指摘している。その理由として、他の巻が話し言葉のみの習得をその主要目標としているのに対して、巻十は、割注に、平仮名本文に対応する、漢字のみによる書き方を示し、単に書簡文のみならず、一般に文章を読み書きできることを目標としていることを挙げている。

長音表記の場合も、大体において、初本どおりで、歴史的仮名遣いによるものが多いが、全体としては、必ずしも、歴史的仮名遣いに、統一されていないことを指摘している。

(3) 諺文表記：原刊本と相違する点の内、注音法から察知できる音韻面について、国語史の観点から述べている。

①濁音の表記：初本どおり、三様の方法が取られている。結果的に、「初本どおり」ではあるけれども、その表記法の内部に、やはり濁音の性格自体の変化を認めることができそうに考えられる。

(a) 第一方法(濁音たるべき音節は清音または半濁音の綴字で示し、その直前の綴字の末尾に m・n・ŋ のどれかを加えて示すもの)は勿論語頭には来ない。初本では、ガ・ザ・ダ・バ行音表記に使用されたが、重刊本では、ガ行音表記にのみ見られる。

かみがた ka - min - ka - ta(三17才)

あかがね' a - kaŋ - ka - nyoi(下1才)

(b) 第二方法(第一の方法の m・n・ŋ を一綴字に取り込み、mp ~・ nt ~・ŋk ~のようにする)は、語頭濁音表記のために案出されたものであろう。

(c) 第三方法(一つの綴字(z)だけで濁音を示す)の、ザ・ジャ行音に限って用いられること初本と同じい。

②重ね子音による表記(本論文では「並書表記」：筆者注)：原刊本との対比を通して、重刊本における重ね子音による表記(本章の並書表記)について、原刊本ではカ・タ行の清音各音節、ソ・ノの音節等の十二音節が並書表記されるのに対して、重刊本ではノが姿を消し、クワ・キヨ・シ・ス・セ・シャ・ショが新たに登場することによって十八音節が並書表記されることを指摘している。

③長音の表記：長音は、ウ・オ列が表記されていて、ア・イ・エ列長音を写し

たと思われる例はない。

ウ列長音の内、拗長音表記について、「ちう」・「にう」・「ゆう」には、ウ列拗单音節にに' u、「じう」・「りう」には、イ列单音節に' u が添えられ、それそれに例外がないことを指摘している。

オ列長音についても、著しい変化は認められない。

仮名表記「あう」・「おう」に対する' o -' u、「おお」に対する' o -' o の例外は依然見られず、この限りにおいては、仮名表記が諺文音注に先行していたことを予想せしめるとする。

タ行オ列拗長音には、初本に見られた tyo -' u で現れるものがある。「てうせん」(三19ウ)「やくてう」(三30ウ)「ひつてう」(八15オ)など、すべて漢語(十一語)で、同一語で、他の表記、即ち cyo -' u を見ないのは、初本に比し、注意される。

④舌内入声及音の表記：初本では、～t・～ccu・～cu で現われ、前二者は、巻によって、その現われ方を異にしていた。初本(卷十)で表わされた～t の八例の内、重ね子音～ccw によって開音節化する二例(「きさつ」(上8ウ)「すいさつ」(中12ウ))を除く六例と、重刊本で新たに加わる「きんじつ」(七13ウ)、合計七例が～t として残る。その他の舌内入声音は、ほとんど～ccw である。

⑤撥音の表記：語中・語尾を問わず、n であるが、唯一の例外は、

せんくわん syəim - koan(二25オ、初本(二17)も)

で、初本と、そして、それ以前に、朝鮮漢字音(c 'yəm)の影響が考えられるとの指摘がある。

以上、安田(1973)の『重刊改修捷解新語』の解題において、森田(1973)の原刊本

の解題との比較を行い、その結果、「原刊本と改修本(本論文では「重刊本」)——中世語と近世語との差は、ある意味では極めて少ない」と述べている。また、「中世語と近世語との差を、音韻・語法の側面から把握した上で、なおかつ朝鮮人の認識を、今、認識しようとすれば、たとえ、「十之八九」という廻異の度合に眩惑されたとしても、新旧両書の差を、具体的に説明し難いのである」とし、外国文献を扱う場合の、原理的な、彼我対応関係は十分反省すべきであると付記している。

2.1.3. 安田章(1987)

安田(1987)は、新たに発見された戊辰板『改修捷解新語』(本論文では「改修本」:筆者注)の解題として、本書の体裁や書誌的な問題が主に取りあげられている。これまで、原刊本と重刊本の解題の中では想像にすぎなかった改修過程が、『改修捷解新語』の新たな発見により改修の中間段階が明らかになったことは言うまでもない。但し、安田(1987)では、言語記述の具体的な状況についてはあまり述べられていないので、本節では、『改修捷解新語』の体裁や書誌的なことを中心に概観する。

これまで、第一次改修本および第二次改修本の実際について知るところがなかったが、ただ第二次改修本は乾隆辛丑の重刊改修本(重刊捷解新語(本論文では「重刊本」:筆者注))を以って代替させて来た。即ち、重刊改修本の、巻末の「辛丑重刊時校正官」に関する記述に、「修正入梓」とか「正書入梓」とかに類する註記の見られなかったこと、および、序の「摹活字而刊諸板」の行から、重刊改修本を、第二次改修本の覆刻本として扱っても大過ないようと思われたのである。これに対して、第一次改修本、即ち、戊辰版については、「重刊捷解新語序」の記述から推察する外なかった。

語音雖尽讎正、倭諺大字、猶仍旧本、而未及改、其後崔知枢、以公幹在萊州、
又從通詞倭人、博求大坂江戸間文字、參互而攷証

によって、「倭諺大字」の隸正に焦点を絞った第二次改修に対して、第一次の段階で既に「語音」は「尽隸正」されていた、従って、第一次改修本の「語音」は重刊改修本のそれと等しいとまで推したのであるが、この是非は、戊辰版の開巻第一丁を見ることによって直ちに明らかになるであろう。(…中略…)
任意の一丁を取っても、本文・音注・対訳朝鮮語のいずれについても、第二次改修時に、手が加えられていると言つてよいのであった。(p.5)

改修本の形式な面においても、「全十二冊の表紙に「捷解新語」、その下に小字で「第一」(以下、第二より第十上・第十中・第十下に至る)と直接墨書されている」とする。さらに、「巻一冒頭の「与代官初相接」以下、節目が設定されたのは、第一次改修本(本論文では「改修本」、以下同様：筆者注)からである」とし、「発言者を「主」(朝鮮人)と「客」(日本人)で明示したのも、第一次改修時における創意であった」ことを指摘している。

第一次改修時に採られた新機軸、つまり、節目設定は、会話の場面を公的なものとして規定し、内容・表現、更には文体に至るまで、一定の枠をはめることに、また、主客表示は表現に対する立場、更に言えば表現の規範を明確にすることに、それぞれ通じる措置であった。(p.5)

以上、安田(1987)では、『改修捷解新語』の体裁や書誌的なことを中心にまとめた。

2.1.4. 辻星児(1997)

『捷解新語』を取りあげ、その資料的価値と言語史的位置づけを試みたものである。第1部と第2部と構成されており、まず、第1部は、『捷解新語』が「日本資料」の一種であるという観点から、諸資料の全体像とその歴史的展開、それらの文献学的位置づけ、歴史的背景などを探ったものである。第2部は、『捷解新語』そのものに焦点を当てて、言語学的考察を行ったものである。

特に、第2部の第5章では、改修本に見られる朝鮮語の配置（「相対」）が朝鮮語、日本語に対する文法分析の意識を反映するものと捉え、それにより両言語における形式の自立性に関わる問題や言語構造の差異を指摘している。その具体的な内容を箇条書きすると、以下のようである。

- (1) 体言：日本語の体言には、それに対応する朝鮮語を相対させることを原則としている。
- (2) 格助詞・副助詞・係助詞類：日本語の体言その他に助詞類（格助詞・副助詞・係助詞など）が付属している場合、一般的に日本語の助詞に対応する朝鮮語の助詞は相対させている。
- (3) 用言複合体（用言の語基に種々の接辞（助動詞）や助詞が付く例。「なりまするまいかと」「きのとくに」等；筆者注）：日本語の用言複合体の文節には、対応する朝鮮語の用言複合体の文節を一括して相対させていることが多い。
- (4) 接続助詞：日本語の接続助詞に対応する朝鮮語の要素は、いわゆる接続語尾であるが、この接続助詞と接続語尾を相対させていない例は多い。
- (5) 複合体内部での相対：日本語の用言複合体を構成する助動詞についても、対応する朝鮮語の形式を時に相対させていることがある。
- (6) 補助動詞：補助動詞はその接続の種類によって、相対の率が異なるが、平均して6割程度の相対率を示している。

さらに、「重刊本では、改修本の方式を踏襲するが、相対をより厳密なものとしている」とし、改修本ではほとんど相対させていなかった日本語の用言複合体の接続助詞、終止語尾もほぼ規則的に相対させているとしている。

2.1.5. 趙瑞熙(2001)

朝鮮時代の日本語学習書の中で、日本語に対してハングルで音注が付けられている『伊路波』『捷解新語』『改修捷解新語』『重刊捷解新語』『倭語類解』『方言類釈』を資料として、「母音表記、子音表記、拗音表記、長音表記、促音表記、撥音表記」

について考察を行ったものである。その具体的な内容をまとめると、以下のようなである。

(1)母音表記：母音ア・イ・ウ・オ及び格段の母音部は語頭、語中においてそれぞれ今日と同じ [a · i · u · o] [- a · - i · - u · - o] であるが、「す、ず、つ、づ」の母音 [u] は中舌の性質を持っていて、エ及びエ段母音部においては yo_i と yo_o が表記され、その yo の音注は n __ の環境がほとんどである。これは韓国語の干渉で nyoi の場合、n が脱落しやすいので、それを避けるために yo を取り入れたのである。

(2)子音表記(清音表記)：清音のほとんどの音注が無声の弛緩である平音で表記されていることから見れば、その音価は今日とほぼ同じだったのであろう。ただ、タ(ダ)行の「ち(ぢ)、つ(づ)」が『伊路波』「原刊本」の ti, tu の表記から、改修本以後の ci, cu に改修されているのは「改修本」以前に破擦音化したことを示し、また、ハ行音が f, f', h, p' (『伊路波』)から h, p' (『原刊本』)、h (『改修本』以後)に改修されているのは両唇摩擦音(ɸ)から喉頭摩擦音(h)になったことを示す。

特定語の特定音節においては濃音表記(本論文では「並書表記」)。以下同様：(筆者注)も用いられている。濃音表記の機能については、ほとんどの場合は韓国語の濃音の特徴である口腔内の空気の圧力が高い tense の部分を表していることから日本語の音声に忠実な表記である。

(3)子音表記(濁音表記)：濁音に表記されている音注には、ザ行の z を除くと平音と鼻音を取り入れた三つの方法が用いられている。韓国語の音韻構造上、平音も環境によっては有聲音になるので、濁音の表記として適切な場合もある。従って、平音で表記(本論文では「単書表記」)。以下同様：(筆者注)されているところは平音のまま発音しても日本語の濁音に相応しかったのであろう。鼻音表記を取り入れたものには二種類がある。即ち、第一方法は、濁音の鼻音的要素

を表すものであり、第二方法は、平音で読んで発音すると韓国語の干渉で清音になる恐れがあり、それを避けるために取り入れた工夫である(第一方法、第二方法は、森田(1973)による:筆者注)。

(4)拗音表記: 拗音における音注表記は、初声字のキ・シ・チ・ヒ・リの子音に、中声字 ya・yu・yo を添えたもので、それぞれ今日と同様の拗音を表している。他の音節の音注に比べて、変化がなく、改修も行われていない。

カ・ガ行唇拗音(本論文では「合拗音」:筆者注)「くわ」「ぐわ」の表記も明らかに koa、ŋkoə のように表記されていることから、直音化されず、[kwa] [gwa] の音価が推定される。また、合拗音にウが続く拗長音の場合はすでに直音化され、コウと同じ、[kou] 或いは [ko:] の音価が推定される。

(5)長音表記: 十七世紀から十八世紀にかけてはウ段長音が確実に存在していた。開音と合音の区別は見られず、長音部は全てuで表記されている。拗長音は iu から uu の方へ改修され、拗長音化される。その音価は、例えば「ぜんきう(前規)」は zyɔiŋ - kyu -' u と表記されているが、「きう」を [kyuu] と発音したか、[kyu:] と発音したかは問題点であるが、おそらく最初の段階では音注を見て [kyuu] と読み、だんだん自然な発音になると [kyu:] のように発音したのではないかと思う。

タ(ダ)行オ段長音に tyo -' u、cyo -' u の二様の表記が現れるが、それは韓国語史の問題であり、日本語の発音は [tʃou] 或いは [tʃo:] であったと思われる。

(6)促音表記: 「原刊本」の促音は、動詞の連用形に「て」「た」が伴う「促音便」とそれ以外とに区別されており、音注も日本語の表記に引かれて表記されている。環境による音声的表記というより、促音 = t という音注の原則があったようである。

促音表記は大部分 t で表記され、稀に見られる k・p 表記も重刊本では t に

統一されているのは、日本語の表記に合わせて音韻的表記に変えていったように見られる。

(7) 摩音表記：摩音は大部分 n で表記されているが、稀に m・ŋ の表記も現れる。m・ŋ の表記は摩音に続く音節の初声の影響であるが、改修されることにより、n に統一される傾向を見せてている。時代が下るに従い、n に統一されることは、音声に忠実な音注表記から日本語の表記に合わせる音韻的表記に変えていったためであると思われる。

以上のように、趙嶧熙(2001)では、各資料に付けられているハングル音注を各音節別に全て調査・考察を行い、その音注が表している日本語の音声・音韻について述べている。同氏の日本語学習書のハングル音注を事細かく調査を行っている点は高く評価できる。但し、これらの調査に基づいて直ちに日本語の歴史的研究の材料とするところで、この研究の限界が見られる。これらの研究に対する筆者の考え等は、第5章以下で詳しく述べる。

2.2. 先行研究の問題点に対する本論文の立場

以上、『捷解新語』の原刊本、改修本、重刊本の解題(森田(1973)、安田(1973)、安田(1987))と本論文と密接な関わりがあると思われる先行研究(辻(1997)、趙嶧熙(2001))を中心に、概観してきた。

以上のような先行研究をふまえて、本論文では、韓国語の表記史・音韻史及び日本語史に基づいた検討、分析を行うことによって、朝鮮資料における規範性を明らかにすることを試みる。

特に、先行研究において、日本語本文の左側に施されている朝鮮語対訳の配置については、具体的に取りあげられてきているのに対して、日本語本文の右側に施されているハングル音注の配置についてはほとんど論じられていないのが現状である。また、漢字をもって対訳する場合、日本語本文に漢字を一字ずつ相対させてい るというものであり、それ以上の踏みこんだ考察がない。そこで、本論文の第4章

以下では、日本語本文に対するハングル音注の配置原理を明らかにするとともに、日本語本文及びハングル対訳・音注における表記と音韻との相互関係を総合的に検討、分析する。

さらに、これまでの先行研究のほとんどが日本語本文を中心とした研究にとどまっていることに対して、本論文では、『捷解新語』が朝鮮語の音韻体系及びハングルの表記原理になじんだ朝鮮人のための日本語学習書という性格から、朝鮮人学習者に正しい日本語を学習させようと日本語本文の仮名表記、朝鮮語による対訳、音注の表記、及び音注の配置が規範的に行われていたことを述べる。

なお、従来の研究においては、『捷解新語』がそのまま日本語史資料として使われた傾向があったのに対して、本論文では、「朝鮮語母語話者のための日本語学習書」であることに重点をおき、日本語本文、ハングル音注及び朝鮮語対訳のハングル表記と、その配置の調査・考察を行うことによって日本語史資料として『捷解新語』の位置づけを改めて論じる。

参考文献

- 荒木雅実(1975)「「捷解新語」の並書法について」国語研究38
- 大友信一(1956)「『捷解新語』に見られる濁音表記」『言語研究』30 日本言語学会
- 大友信一(1957)「『捷解新語』による国語音の研究」『文化』11・4 東北大学文学部
- 奥村知子(1991)「ハ行子音の音価と表記——朝鮮資料『捷解新語』を中心に——」
『文献探求』27
文献探求の会(九州大学文学部国語学国文学研究室)
- 小倉進平(1964)『増訂補注 朝鮮語学史』刀江書院
- 亀井 孝(1984)「捷解新語の注音法」日本語のすがたとこころ(一)音韻
吉川弘文館
- 杉戸清樹(1989)「原刊本『捷解新語』のエ段音節母音部への音注について」
『野村正良先生受章記念言語学論集』野村先生受章記念刊行会
- 杉戸清樹(1992)「『捷解新語』タ行オ段拗長音子音部への音注について」

日本語論究2 古典日本語と辞書』和泉書店

濱田 敦(1955)「語末の促音」『国語国文』24・1

濱田 敦(1967)「朝鮮資料」『異本隣語大方・交隣須知』

京都大学国語学国文学研究室

濱田 敦(1970)『朝鮮資料による日本語研究』岩波書店

森田 武(1973)「捷解新語解題」「三本對照 捷解新語 釋文・索引・解題篇」

京都大学文学部国語国文学研究室編

安田 章(1964)『全一道人の研究』京都大学国文学会

安田 章(1970)「ハ行音のこと」「奈良女子大学国文学会誌」

『朝鮮資料と中世国語』(1980)所収「ハ行音と朝鮮資料」

安田 章(1973)「重刊改修捷解新語解題」

『三本對照 捷解新語 釋文・索引・解題篇』

京都大学文学部国語国文学研究室編

安田 章(1980)「朝鮮資料と国語表記」「朝鮮資料と中世国語」笠間書院

安田 章(1987)「改修捷解新語解題」「改修捷解新語 本文・國語索引・解題」

京都大学文学部國語学國文學研究室編

安田章、鄭光 共著(1991)『改修捷解新語』太學社 ソウル

Seung-bog Cho(1967)『A PHONOLOGICAL STUDY OF EARLY MODERN
JAPANESE —— ON THE BASIS OF THE KOREAN
SOURCE-MATERIALS ——』 Volume I
Material, Historical Background, Methodology and
Sound Correspondences
ALMQVIST & WIKSELL. STOCKHOLM

Seung-bog Cho(1970)『A PHONOLOGICAL STUDY OF EARLY MODERN
JAPANESE —— ON THE BASIS OF THE KOREAN
SOURCE-MATERIALS ——』 Volume II
Analysis and Reconstruction of Early Modern Japanese

Phonology

ALMQVIST & WIKSELL, STOCKHOLM

参考資料

京都大学文学部国語学国文学研究室編(1957)『捷解新語』京都大学国文学会

- (1958)『倭語類解』京都大学国文学会
- (1960)『重刊改修捷解新語』京都大学国文学会
- (1963a)『捷解新語文枳』京都大学国文学会
- (1963b)『隣語大方』京都大学国文学会
- (1965)『弘治五年朝鮮板伊路波』京都大学国文学会
- (1966)『交隣須知』京都大学国文学会
- (1967・68)『異本隣語大方・交隣須知』京都大学国文学会
- (1969)『異本隣語大方・交隣須知補』京都大学国文学会
- (1972)『三本對照 捷解新語 本文篇』京都大学国文学会
- (1973)『三本對照 捷解新語 譯文・索引・解題篇』京都大学国文学会
- (1987)『改修捷解新語』京都大学国文学会

『原本國語國文學叢林 蒙語類解 倭語類解 捷解新語』原本國語國文學叢林17(1985)

大提閣 ソウル

『方言類釋』(1985)弘文閣 ソウル

『原刊活字本 捷解新語』(1990)弘文閣 ソウル

『重刊捷解新語』(1990)弘文閣 ソウル

安田章、鄭光 共著(1991)『改修捷解新語』太學社 ソウル